

『顯誦法鈔』(定二七二—三頁)、『法華題目鈔』(定三九二頁)、『四信五品鈔』(定一二九六頁)、『日女御前御返事』(定一三七六頁)などにおいて、五逆・謗法・一闍提と関連づけられた、信不信のありようと末法の凡夫の成仏についての検討がみられるが、その構図が端的に示されているのが『波木井三郎殿御返事』にみられる。

阿闍世王殺^レ書父^ニ禁^セ固^シ母^ヲ惡^シ人也。雖^レ然^ト來^テ涅槃經^ニ座^ニ聽^ク聞^ク法華經^ニ非^レ治^シ現世惡瘡^ニ延^シ引^ク四十年壽命^ニ結^シ得^テ無^ク根^ニ初住佛記^ニ。提婆達多闍浮第一^ニ一闍提人捨^テ置^ク。一代聖教^ニ奉^テ值^ヒ此經^ニ授^テ與^テ天王如來^ニ記^シ前^ニ。以^テ彼推^レ之^ヲ末代惡人等^ニ成佛不成佛罪^ニ不^レ依^テ輕重^ニ。但此經可^レ任^シ信不信^ニ。(定七四九頁)

という一節であると思われる。ここで阿闍世王・提婆達多^の事例をもとに、末代の悪人の成仏は信不信のありようによるという結論が導き出されるが、その背景となっているのが「五逆・謗法・一闍提」の成仏についての検討であると考えられる。そして「末代の悪人」とは、とりもなおさず末法の凡夫であるといえるであろう。

以上のような点から、日蓮聖人は一闍提成仏や阿闍世王・提婆達多などの最も救われたい者を中心として仏

性の検討をおこなっているといえるだろう。そして、その仏性についての検討は、理論として標榜された一切衆生悉有仏性をいかに具現化し、末法の衆生の成仏に結びつけるかという、より現実的なものであったといえるのではなからうか。

八品の世界

芹 澤 寛 哉

一、

八品の世界は観心本尊抄において詮顯された本尊の世界であって、一切の存在や理法の帰趨であると同時に根源たる超越の世界である。本尊抄第二十番問答において明示されているこの世界は

- 1、時間的には無限永遠で常住
- 2、空間的には無辺、三千の依報正報の一切を具足する。
- 3、不生不滅の永遠と変化の瞬間、一切の全と所化の

個の相即同体

この様な世界は超越絶待としか言表するほかはないが、法華経の中でも説かれているのは從地涌出品第十五の上行等の地涌出現から囑累品第二十二の多宝仏塔及び上行等の退場迄の八品である。

一一、

日蓮聖人がこのような超越絶待界を本尊として體現せられに至った途には二途が考えられる。

1、論理的方法

宗祖の時代には真理探究の方法論が独立しているわけではないので、所謂教相判釈の方法特に天台の方法が依用されているのは当然である。現実の多様な迷界の生活から正覚の世界に上る途、即ち從因至果の論理的方法として五重相待の方法がある。それは開目抄の中の全仏教及び諸他の宗教の中から真実の教を確定しようとした教判であるが、真実の教がそのまま真理の世界とされていたのである。この方法は知を以て合理的順序に従がひ、次第に遡って高次の概念に進み最後の第五相對で達した頂点は教の一品二半、そして更にその奥に知を越える觀心に至ったが、觀心とても知（思惟）の延長上の極点で

ありそれを越えるものではない。それはヘーゲルの絶對精神に比せられるであろう。

2、體驗の方途

知の限界を否定的に超越して絶待の世界への轉換は死に直面した極限の體驗によってであり、宗祖の竜口より佐渡に至るそれであろう。一切の現実界及知識の否定は本尊抄の「在世五十余年にこれなし」、絶對界の本尊出現は「但八品に限る」と表現されている。従つてこの八品の世界は現実の法華経の一部分たる八品ではなく超越八品又は本地八品である。

三、超越世界の現実への還歸

超越世界にある絶待の本尊は現実の相待世界へ還歸するとき吾人の救済となる。絶待から相待界への下降は人間の知による自力の途が否定され本仏の大悲による、「一念三千を識らざる者（知の否定） 仏大慈悲を起し（大悲の下降）であり、われわれがそれを感得するのは信である。神力品の付囑（仏の慈悲）と受持（上行の信）の図式がその型である。時は一念隨喜の瞬間であり、場所は即是道場（隨處の一点）である。救済は知の段階を否定超越する信によつて本尊の世界が我々のもの

となると云うよりもむしろ我々が本尊の世界の中に撰取されたとされる所に完成する。

現実の世界から次第に遡及して絶対界に至り、再び現実へ還帰して現実界を浄化して高めるとの宗教の論理を追求する上において八品の世界の超越性の説明がキイポイントであらう。